中野香織の

Luxury Quest 贅沢の本質

［ラグジュアリー・クエスト］

Photos : HIROSHI TAKASE
Text : KAORI NAKANO

vol.3

Absurdity

ラグジュアリーとは、不条理と戯れる精神の冒険?

ラグジュアリー追求の果てに待っているものは「不条理」

2007年11月末、モスクワのザ・リッツ・カールトン・ホテルで「シュプリームラグジュアリー」会議が開かれた。LVMHグループのCEOベルナール・アルノー、グリスチャン・ディオールのCEOシドニー・トレダノはじめ、トム・フォードやドナテラ・ヴェルサーチらが、ロシアにおけるラグジュアリーブランド進出の可能性を探るべく結集。しばらく封印されていた帝政時代のリュクスの記憶が、オイルマネーが生んだ新興富裕層のパワフルな消費に刺激されてきめきと目覚めゆく…といった感もあるロシアのラグジュアリー光景は、今後ますます面白くなりそうである。

同時開催の「ミリオネアフェア」では、これでもかとラグジュアリーを誇示する商品が展示された。ジュエリーでモザイクしたプーチン大統領の肖像画に、ベイズリー柄の車、そしてダイヤモンドをあしらったベントレーの100万ドルのタイヤ…。

ダイヤモンド付きのタイヤって、意味があるのか? パンクしたらどうするのか? それってラグジュアリーの探求というよりほとんど愚行ではないのか? 不条理なまでのばかばかしさに、やがて笑いがこみあげてくる。

しかし。歴史をふりかえってみれば、ラグジュアリー追求の果てには常に不条理(absurdity)が待っていた。

16世紀、美公フィリップの時代には、貴族たちは靴先を65㎝にまで伸ばし、歩行困難になった。フランスのブルボン朝、マリー・アントワネットの時代には、高く結い上げた髪の上に船や牧場の模型を載せ、それを作るために髪結い師がはしごをつかって昇り降りした。19世紀英国ヴィクトリア女王時代には、スカートを広げるための装置クリノリンは巨大になりすぎ、ドアを通れなくなったり、ろうそくの火が燃え移るなどの惨事を招いたりした。

中産階級的な常識・合理性などラグジュアリーには不必要?

それでも人は、ラグジュアリーをナンセンスなまでに極めようとする。現代においても、ファー付きのカトラリーや、クリスタルをちりばめたキッチンなど、「洗えないじゃないか!?」という中産階級的ツッコミを高みからせせら笑うようなラグジュアリー製品が続々登場している。

実用性や合理的な意味、常識的な慣習など知ったことではない、と突き抜けてしまえることは、特権的な快楽でもある。そもそも人生したい、「意味」を問えば空しい不条理に満ちている。とすれば、愚かしさと紙一重のラグジュアリーの追求は、不条理だらけの人生と積極的に戯れてやろうじゃないかという精神の挑戦でもあるのかもしれない。

なかの・かおり●エッセイスト・服飾史家。1962年生まれ。東京大学文学部および教養学部卒業。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得。イギリスのケンブリッジ大学客員研究員などを経て文筆業に。イギリスとその文化にも詳しい。連載記事は日本経済新聞、朝日新聞ほか多数。近著は『着るものがない!』『モードの方程式』(共に新潮社刊)など。訳書も多数手がけている

実用性や合理的な意味、常識的な慣習など知ったことではない、
と突き抜けてしまえることは、特権的な快楽でもある。

ウサギのファーが付いたカトラリー、「ア・ポワル」シリーズ。この合理性のなさに、ラグジュアリーの本質を感じ取ることができる、センスある方に。〈写真手前から〉カービングフォーク、ケーキサーバー、カービングナイフ各¥38,325〔すべて完全受注発注形式〕〈右奥・ケーキ皿の上〉ドロップ デザートナイフ、デザートフォーク各¥9,975、〈下に敷いたトレイ〉ラディウス トレイ¥89,250(すべてクリストフル／クリストフル ブティック 東京)